

「正しい人は一人もいない」

2018年09月01日

ローマの信徒への手紙 3章9節～20節 では、どうなのか。わたしたちには優れた点があるのでしょうか。全くありません。既に指摘したように、ユダヤ人もギリシア人も皆、罪の下にあるのです。次のように書いてあるとおりです。

「正しい者はいない。一人もいない。悟る者もなく、／神を探し求める者もいない。皆迷い、だれもかれも役に立たない者となった。善を行う者はいない。ただの一人もいない。彼らののどは開いた墓のようであり、／彼らは舌で人を欺き、／その唇には蝮の毒がある。口は、呪いと苦味で満ち、足は血を流すのに速く、その道には破壊と悲慘がある。彼らは平和の道を知らない。彼らの目には神への畏れがない。」

さて、わたしたちが知っているように、すべて律法の言うところは、律法の下にいる人々に向けられています。それは、すべての人の口がふさがれて、全世界が神の裁きに服するようになるためなのです。なぜなら、律法を実行することによっては、だれ一人神の前で義とされないからです。律法によっては、罪の自覚しか生じないのです。

パウロは、「では、ユダヤ人の優れた点は何か」と問うた。次に、「では、どうなのか。わたしたちには優れた点があるのでしょうか」と、人間一般論として問うている。答えは「全くありません」と、ユダヤ人もギリシア人も皆罪の下にあり、優れた点はみじんもないと言っている。そして、その罪を下記のように、旧約聖書の言葉から指摘している。① 「正しい者はいない。一人もいない。悟る者もなく、／神を探し求める者もいない。皆迷い、だれもかれも役に立たない者となった。善を行う者はいない。ただの一人もいない。」詩編 14 編 1節～3 節に「神を知らぬ者は心に言う／「神などない」と。人々は腐敗している。忌むべき行いをする。善を行う者はいない。主は天から人の子らを見渡し、探される／目覚めた人、神を求める人はいないか、と。だれもかれも背き去った。皆ともに、汚れている。善を行う者はいない。ひとりもいない」とある。② 「彼らののどは開いた墓のようであり、／彼らは舌で人を欺き、／その唇には蝮の毒がある。」詩編 5 編 10 節に「彼らの口は正しいことを語らず、舌は滑らかで／喉は開いた墓、腹は滅びの淵」とある。③ 「口は、呪いと苦味で満ち、」詩編 10 編 7 節に「口に呪い、詐欺、搾取を満たし／舌に災いと悪を隠す」とある。④ 「足は血を流すのに速く、その道には破壊と悲慘がある。彼らは平和の道を知らない。」イザヤ書 59 章 7 節、8 節の「彼らの足は悪に走り／罪のない者の血を流そうと急ぐ。彼らの計画は災いの計画。破壊と崩壊がその道にある。彼らは平和の道を知らず／その歩む道には裁きがない。彼らは自分の道を曲げ／その道を歩む者はだれも平和を知らない。」また、箴言 1 章 16 節に「彼らの足は悪事に向かって走り／流血をたくらんで急ぐ」とある。⑤ 「彼らの目には神への畏れがない。」詩編 36 編 2 節に「神に逆らう者に罪が語りかけるのが／わたしの心の奥に聞こえる。彼の前に、神への恐れはない」とある。パウロは徹底的に人間の罪を見つめている。神を畏れる者の視点である。全ての律法は、律法の下にある者に向けられている。そして、全ての人の口が塞がれ、神の裁きに服さざるを得ない。律法を実行することによっては、誰一人、神の前で義とはされない。律法によっては、罪の自覚が生じるのみである。律法は神との正しい関係に入ることを約束しているが、人間はその律法を守ることができず、罪が露わになるだけである。パウロが行き着いた絶望的な人間理解である。